

|         |   |
|---------|---|
| 氏名      | 村澤 丈児   |
| ヨミガナ    | ムラサワ ジョウジ   |
| 学位の種類   | 博士（音楽）  |
| 学位記番号   | 博音第325号   |
| 学位授与年月日 | 平成31年3月25日  |
| 学位論文等題目 | 〈論文〉地歌謡物の研究<br>〈演奏〉翁 峰崎勾当、<br>虫の音 藤尾勾当、<br>西行桜 菊崎検校 |

論文等審査委員

|    |        |       |        |       |
|----|--------|-------|--------|-------|
| 主査 | 東京藝術大学 | 准教授   | （音楽学部） | 上條 妙子 |
| 副査 | 東京藝術大学 | 教授    | （音楽学部） | 萩岡 松韻 |
| 副査 | 東京藝術大学 | 教授    | （音楽学部） | 武田 孝史 |
| 副査 | 東京藝術大学 | 教授    | （音楽学部） | 塚原 康子 |
| 副査 | 東京藝術大学 | 非常勤講師 | （音楽学部） | 乗松 昌江 |

（論文内容の要旨）

本研究は、地歌作品の中で「謡物」とよばれる作品群について、能とのかかわりを中心とした分析・考察を行うものである。

「謡物」とは広義には「能とかかわりを持つ地歌作品」を指す言葉であり、曲の形式、作曲背景などが多岐に渡っているため包括的な研究が難しく、今まで「謡物」に特化した研究はあまりなされていない。また、これまでの研究は、詞章の撰取のしかたなどの文学的な研究が主であり、能との音楽的なかかわりは深くないというのが主な見解であった。しかし筆者は、今までの演奏経験などを通して、「謡物」には能と音楽的に深いかかわりのある作品があると感じてきた。本研究は、江戸期に作曲され、現在伝承が確認できている「謡物」について、構成や音楽面での能とのかかわりを追求することを目的としている。

本論文は二部構成をとっている。

第一部では、「謡物」を「A 歌舞伎に用いられていたと思われる作品」（13曲）「B 十八世紀に名古屋で作曲されたと思われる作品」（6曲）「C その他」（21曲）に分けて各曲の分析を行い、構成や音楽面での能とのかかわりや、「謡物」に共通する特徴をまとめた。分析では、各曲の詞章の撰取のしかた、詞章の組み替え、地歌独自の詞章などに着目し、その上で「手事」や「合の手」などの配置に能との関連がみられないかを探り、更に能のリズムを取り入れているとみられる部分を、能の「ノリ型」の分類「平ノリ」「中ノリ」「大ノリ」に倣い、「平ノリ風」「中ノリ風」「大ノリ風」「特殊な型」に分類するという、これまでなされなかった分析を試みた。

その結果、A作品は詞章の撰取のしかたが多様であり、地歌独自の詞章が能の内容と関連している作品が多いこと、能への理解に基づく構成をした作品が多くあること、情緒的に始まり曲の最後部分が「ノリ型」のリズムに即した歌となる作品が多いこと、その「ノリ型」に即したリズムが引用元の「ノリ型」と一致している作品が多いこと、多くの曲に共通して使用されている音型があることなどが分かった。B作品は、これらのA作品と共通する特徴を多くもっていることが分かった。C作品にも、「長歌物」や「手事物」といった形式でありながらA、B作品の特徴を取り入れている作品が散見され、また作曲者の能への理解が感じられる作品も散見された。

第二部では、各曲の作曲背景を探り、第一部で分析した「謡物」の様々な特徴が生まれた要因を探った。江戸期に入ると、「能」が武家の式楽とされた一方、「謡曲」は独立した芸能のような形で、広く民間に浸透していた。A作品が主に生まれた十八世紀の歌舞伎は、様々な面で能の要素を色濃く取り入れており、作曲にかかわった人物の能への理解は深く、その結果、構成等の面で能との関連が深い作品が多く生まれたと推測できた。共通する曲の構成は、元禄歌舞伎で多く行われていた「怨霊事」という演出と関連していると予測した。また「同音合わせ撥」の連続が、使用されている場面と音型の二点で太鼓の「頭」と類似しており、A作品にはまだ能に近い形であった囃子事に合わせる形で生まれた音型や旋律があることが推測できた。B作品は、A作品と共通する特徴を多くもっており、A作品の影響を受けていることが分かった。これは当時の名古屋では三都からの歌舞伎の来演が盛んであり、能、謡曲も身分を問わず深く浸透していたという背景によるものと推測した。C作品の中では、特に《融》《西行桜》《鉢の木》《梅が枝》《京松風》が能とのかかわりが深い作品であることが分かった。C作品において能のリズムを取り入れたとみられる部分のほとんどが「大ノリ風」であったが、これは引用元のノリ型よりも、A、B作品の曲調を意識した結果と推測した。他にも、調絃・構成においてA、B作品を意識しているとみられる《鶴亀》などの作品もみられた。これらのことから、A、B作品の①「三下り」の作品が多い、②情緒的に始まり終盤で能のリズムを取り入れ盛り上がる、③特定の旋律を用いる、といった特徴が、「能から詞章を引用した作品」の作曲技法として定着していた可能性がみえてきた。また、《神楽》に「打合せ」が可能な形で作曲された《鳥追》は、《神楽》が引用している能《室君》の内容をも意識していることがうかがえた。C作品各曲については、作曲者がどのようにして能の構成を知ったかなど、このような作品が生まれた要因は特定できなかった。

以上の分析、考察から、「謡物」には構成、音楽面で能とのかかわりの深い作品が多くあることが分かり、その要因をある程度探ることができた。現在も演奏されている地歌作品に、ここまで能との深いつながりがあるということは演奏家、研究家に認識されておらず、演奏、楽曲研究において重要な知見を示すことができた。

(総合審査結果の要旨)

演奏審査会では、地歌の謡物作品の中から「翁」「虫の音」「西行桜」が選曲された。「翁」は三絃の弾き歌い「虫の音」は三絃と胡弓の合奏で「西行桜」を三絃、箏、尺八の三曲合奏でとすべて異なる編成で演奏する意欲的なプログラムであった。能の影響を意識しながら安定感のある演奏でそれぞれの曲を良くまとめあげていた。ただ歌唱においては、やや平板に聞こえ各作品の持つ性根、その曲の背景を研究した上で、どの様に反映させ、魅力ある歌として表現していくのかは、今後の課題である。

論文は、地歌作品の中で謡物と呼ばわれる作品群について能とのかかわりを中心に分析考察したものである。二部構成をとっており、第一部では江戸時代に作曲されたと思われる謡物40曲を「歌舞伎に用いられていたと思われる作品」「18世紀に名古屋で作曲されたと思われる作品」「その他」に分類し、構成やノリ型などに即して能との関係を検証し謡物の音楽的特徴を導き出した。第二部では各曲の作曲背景を探り、謡物の様々な特徴が生まれた要因を考察している。本研究を通して謡物が能の詞章の引用に留まらず、実際は構成、音楽面において能とのかかわりが深い作品が多い事が検証され興味深い。楽曲と実演をもとに分析し、演奏する際の穏急や雰囲気の変化などに着目し、実技専攻者ならではの音楽的な側面からの調査研究は大変意義深い。ただ、細部に至っての分析の余地がまだあるので、継続される事を望みたい。筆者は幼少期より現在の専攻である箏、三絃のみならず、宝生流謡曲を学び謡本、音源など関係資料を多く有する様な家庭環境があった。また、また長年に亘り、その習得に研鑽を積んだからこそ、地歌謡物への深い考察を可能にし、優れた研究成果をあげたと思われる。

以上の点を総合的に評価し、合格の水準であると判断した。